

量であり、児童にとっては負担が大きい。絶えず児童の様子を観察しながら、点の数が少ないものにしたたり1行すべて書かずに5個書くという課題にしたたりするなどの配慮をする。

エ (ケ)の①の点と③の点の連続(⠠⠠⠠⠠)書きと、(コ)の①⑥の点と③④の点の連続(⠠⠠⠠⠠)書きは、マスの中の六つの点の間隔を点筆の動きで感覚的に理解するとともに、点筆の動きをスムーズにして次のマスに移るための練習としても効果的である。六つの点を書く練習の中で、時間内にいくつ書けるか競争をするなどして意欲や興味をもたせ、単調な練習にならないように配慮する。

オ 書いた点は必ず触って確認するようにし、連続した模様のような点や均等の高さにそろった点に触れて、その心地よさを実感したり、レールなどに見立てたりするなど、児童自身や楽しさや面白さを感じられるようにするとよい。

カ ⠠を書いた際に②の点が薄く出てしまうような探り点、定規の外側に誤って打ってしまった行間打点などはできるだけないほうがよいが、初期の段階では完全になくすことをねらいとするよりも、六つの点の位置を理解して意図したところに点筆を落とせるようにすることをねらいとして優先する。

### 第3節 字音と点字を結び付けて、語を書き表す学習

点字を書くための道具の操作に慣れてきたら、文字言語としての点字の書きの練習に入る。点字は平仮名や片仮名などと同じように1音1文字を原則としている記号であるから、音の理解は不可欠である。したがって、最初に音を意識させ、そのうえで文字としての点字を指導する。

#### 【題材5-5】

(1) 「同じ音はどれかな」

〈ねらい〉

単語を作り上げている音を正確にとらえ、点字で書き表すことができる。

〈内容〉

ア 「あめ」「うめ」「こめ」など身近な単語を三つ提示し、同じ音はどれかを質問する。

イ アで答えた音を、点字ではどのように書くのかを考えて書いてみる。

ウ 正しく書けたかの確かめを行う。

【留意事項】

ア 書きの導入指導では、指使いの練習順序に合わせて、点字タイプライターを使う場合は⠠から、点字盤を使う場合は⠠ ⠠などの点の少ない字から行う。

イ 文字の効果的な学習という点からも、読みの学習と常に関連付けながら行う。

ウ 字音と点字が結び付くように様々な単語を探し、書いたり読んだりすることを繰り返すが、「書けた」「読めた」という喜びを大切にする。

エ 単語は身近でよく知っているものを選ぶ。

(2) 「五十音を書いてみよう」

〈ねらい〉

五十音表を正しく書くことができる。

〈内容〉

ア 「か」を長くのばして発音し、どんな音が残るか調べる。

イ 「ア」の音が残ることが確認できたら、ア列の「か」以外の残りについても同様に確認する。

ウ ア列の点字の記号を学ぶ。

エ イ列からオ列も同様に学び、ア行の点字記号を書く。

オ ア行と列を組み合わせ、点字記号で五十音表を書く。

【留意事項】

ア 読みの学習との関連から、行の知識が定着している場合は、行の指導から入ってもよい。

イ 「列」の知識は、今後の拗音や仮名遣いの指導に不可欠な内容なので、丁寧に指導する。

ウ 「ヤ行」と「ワ行」の点字記号は、他の行と規則性が異なるので、注意して指導する。

(3) 「濁音と半濁音の書き方を知ろう」

〈ねらい〉

濁音と半濁音を含んだ類似単語を、正しく書き分けることができる。

〈内容〉

ア 「カラス」と「ガラス」、「ベンチ」と「ペンチ」の単語を並べて示す。

イ 濁音の場合には「ㇿ」、半濁音の場合には「ㇿ」が付くことを見つける。

ウ 次のような類似単語を正しく書き表し、濁音と半濁音の表記に習熟する。

(ア) 「カ行」と「ガ行」

「かま」と「がま」、「つき」と「つぎ」、「ふく」と「ふぐ」、  
「けた」と「げた」、「こま」と「ごま」

(イ) 「サ行」と「ザ行」

「さる」と「ざる」、「にし」と「にじ」、「うす」と「うず」、  
「あせ」と「あぜ」、「そうり」と「ぞうり」

(ウ) 「タ行」と「ダ行」

「たんご」と「だんご」、「ち」と「はなぢ」、「つつみ」と「こ  
づつつみ」、「てんき」と「でんき」、「まと」と「まど」

(エ) 「ハ行」と「バ行」、「パ行」

「はす」と「ばす」と「ぱす」、「ひりひり」と「びりびり」と  
「ぴりぴり」、「ふた」と「ぶた」、「ベンチ」と「ペンチ」、「ほ  
ん」と「ぼん」と「ぽん」

【留意事項】

濁音、半濁音を用いるいろいろな単語を挙げ、習熟を図る。

(4) 「促音の書き方を知ろう」

〈ねらい〉

促音を含んだ単語を、正しく書き表すことができる。

〈内容〉

ア 「ねこ」と「ねっこ」の単語を示し、交互に発音して両者の違いに気付く。

イ 「ねっこ」の場合には、「ㇿ」を用いて書き表すことを見つける。

ウ 促音を含む様々な単語を探し、発音をしながら書き写し、促音の表記に習熟する。

【留意事項】

ア 「ねこ」は2拍、「ねっこ」は3拍と、促音がある場合とない場合で音節数に違いが出るので、発音を繰り返して両者の違いをとらえるようにする。

イ 促音化いかんにかかわらず、意味の理解を容易にするために、促音符を用いない場合があることにも留意する。

例 本の冊数（さつすう）

(5) 「長音の書き方を知ろう」

〈ねらい〉

長音を含んだ単語を、正しく書き表すことができる。

〈内容〉

ア ア列の長音を含む単語を挙げ、発音する。

イ のばす部分に「ア」の音が出てくることを確認する。

ウ 挙げた単語を書き表して示し、文字を読みながら発音する。

エ アからウの確認をし、ア列～オ列の長音についての書き表し方を知る。

(ア) ア列、イ列、エ列の長音は、それぞれのばしたときに出てくる音を添えて書く。

例 ア列 オカアサン オバアサン

イ列 オニイサン オジイサン

エ列 オネエサン

(イ) ウ列の長音は、長音符を添えて書き表す。

例 キューショク クーキ ガッキュー

(ウ) オ列の長音は、原則として長音符を添えて書き表す。

例 オトーサン イモート オーサマ ガッコー

【留意事項】

ア エ列の長音として発音される単語の中に、「イ」を添えて書き表すものがあることを説明する。

例 トケイ センセイ ケイタイ

(トケエ センセエ ケエタイと聞こえる)

イ オ列の長音の単語の中で、「オ」を添えて書き表す場合について説明する。

例 トオクノ オオキナ コオリノ ウエヲ オオキナ  
オオカミガ トオッタ

(「かな文字の教え方」出版：むぎ書房 著：須田清)

ウ ウ列の長音と間違えやすい語については、丁寧に説明する。

例 オモウ (思う) ヌウ (縫う) スウ (吸う)

(6) 「拗音の書き方を知ろう」

〈ねらい〉

拗音を含んだ単語を、正しく書き表すことができる。

〈内容〉

ア 「きゃ」「きゅ」「きょ」の付く単語を挙げる。

イ アで挙げた単語の書き表し方を学び、「ㇿ」が付くことに気付く。

ウ 発音をしながら書き写し、カ行を用いた拗音の表記に習熟する。

エ 他の行の拗音、拗濁音、拗半濁音、拗長音、拗促音についても、上記アからウ及びこれまでの題材の確認をしながら学ぶ。

【留意事項】

中途視覚障害者の指導に当たっては、墨字のような小書きではなく、「ア列」「ウ列」「オ列」に拗音点を用いて書き表すことを丁寧に指導する。ローマ字表記における y の部分が拗音符 (ㇿの点) であることを説明するとわかりやすい。

例 きゃ (kya) 4 の点 (y) + か (ka) ㇿㇿ

(7) 「言葉集めをしよう」

〈ねらい〉

点字仮名の清音を覚え、様々な言葉を表記することができる。また、自分の書いたものや友達の書いたものなどを読み、正しく伝えるためには1点1点を正しく書くことが大切であることに気付くことができる。

〈内容〉

ア 「ア」で始まり「イ」で終わる言葉を集める。

イ アで取り上げた言葉を書く。

ウ 書いたものを、自分で読んだり、友達のものと交換したりして確認

する。

【留意事項】

ア 書き誤った場合の訂正の仕方として、「⦿⦿」を用いる方法を指導する。「⦿⦿」を用いて訂正する場合は、言葉の一部の書き誤った箇所だけを「⦿」にすると読みにくいというえに意味が通じなくなるので、言葉全体（マスあけからマスあけまで）に「⦿⦿」を書いて訂正することを習慣づけるようにする。

イ 点消し器を使って訂正する方法は、他の点まで消してしまうことも多いので、児童には現実的ではない。

ウ 仮名遣いの誤りは指摘し、書いた字を確認しながら指導をする。

(8) 「しり取りをしよう」

〈ねらい〉

点字仮名の構成を理解し、様々な言葉を正しく書き表すことができる。

〈内容〉

ア しり取りを行う。

イ 上記アで取り上げた言葉を点字で書く。

ウ 一定時間内に書ける言葉の数や、書き誤りの少なさを競う。

エ 書いたものが正しく書けているか、確かめを行う。

【留意事項】

ア 盲児の場合は、発音をしている人の口の形を視覚的に模倣することが難しいことや聴覚を通して語彙を獲得することが多いなどの理由で、発音が誤っていたり、拍数が正確でなかったりすることがある。その場合は、導入として発音を確認しながら、音を数える練習をする。

誤りやすい例：キヨツケ（号令の「気をつけ」）、シクダイ（宿題）、タイクカン（体育館）

イ 点字を書く際に、音を口に出しながら行う。

ウ 一定の速さで確実に書くように指導する。

## 第4節 分かち書きと切れ続きの学習

点字は表音文字であるために、分かち書きと切れ続きの原則に従って書き表された文でなければ意味を理解しながら速く読むことができないうえ